

作家たちの出会いと交錯 —ビュヒナーの『レンツ』をめぐって—

元吉 瑞枝 (ドイツ語圏文学)

現在、EU＝欧州連合の議会在置かれているストラスブールは、フランスとドイツの国境にあり、フランスとドイツの両文化が混淆し、かつ両国の歴史的抗争地としてフランスになったりドイツになったりすることで知られているアルザス地方の中心都市である。かつて、当時（現在と同様）フランス領だったこの都市へ、ドイツ文学史上重要な三人の作家たちがライン河を渡ってやってきて青春時代を過ごし、互いに会うことになった。ストラスブールとそこでの出会いは、彼らの生涯にとって、またドイツ文学史にとっても、重要な意味をもつこととなった。三人とは、ゲーテとレンツとビュヒナーである。

ゲーテ (1749－1832) は、1770年、21歳のとき、ストラスブールへやってきたが、ここで彼の今後の発展にとって重要なものとなった二つの出会いを体験した。一つは、彼をホメロスやシェクスピアやオシアンの世界へと導き、民謡や自然や生きた感情のもつ価値にも開眼させてくれた新進の批評家ヘルダーとの出会いであり、それはシュトルム・ウント・ドラング (疾風怒濤) と呼ばれる新しい文学運動へと結実した。もう一つは、牧師の娘フリーデリーケとの出会いであった。彼女との出会いは、ゲーテの叙事詩にこれまでにはなかった個性的な新しい次元の表現を与えることになったが、彼女との別れ、特に自分を信じていた無辜の女性を傷つけて捨てたという罪の意識も、「野ばら」の詩や『ファウスト・第一部』のグレートヒェン像に見られるように、のちのゲーテの作品に長く影を落とすことになった。とはいえ、現実のゲーテは、その後も次々に成長と変容を遂げ、ワイマールでは大臣まで勤めるなど、常に新しい世界に身を投じ、その文学の世界の幅を広げると共に、多彩な交友関係や女性たちとの恋愛も老年

に至るまで続いたことも、また彼の本質的な一面であった。

J. M. R. レンツ (1751-1792) は、ロシア領リヴォニア (現ラトヴィア) に生まれ、カントのいたケーニヒスベルク大学に遊学したのち、貴族の士官の家庭教師となってストラスブールへ旅立った。そこでゲーテと知り合い、シュトルム・ウント・ドラング運動に共鳴して身を投じ、『演劇覚え書』のような評論や、のちにビュヒナーやブレヒトなどにも影響を与えた『家庭教師』『軍人たち』などの鋭い社会風刺劇を書いた。⁽¹⁾ ゲーテがやがてこの運動から距離をとっていくのに対して、レンツは或る意味で一生涯その精神を生き続けた。彼は、同時代の作家からは理解されることなく孤立しながら、ゲーテに対してはアンビバレントな感情を抱きつづけ、ゲーテが捨てたフリーデリーケに近づいたり、ゲーテの後を追ってワイマールに赴いたりしたが、ゲーテから疎まれ、宮廷からも追放された。その後、各地を転々として流浪の日々を送るうちに精神錯乱に陥って、モスクワ近郊の路上で斃れ、41歳でその生涯を終えた。ゲーテは『詩と真実』の中で、レンツを「夜空をさっと流れゆく彗星のように、ドイツ文学の地平線上にはほんのつかの間姿を現し、この世に一つの痕跡もとどめずに、突然消えうせてしまった」⁽²⁾ と評している。

ゲーテとレンツの出会いから約60年後の1931年、19歳でストラスブールへやってきたゲオルク・ビュヒナー (1813-1837) は、この二人と現実に出会うことはなかったが、当地で文献を通して、二人の邂逅やその後のレンツの運命を知った。人間的にも文学的にもビュヒナーが関心を寄せたのは、ゲーテではなくレンツだった。

ゲオルク・ビュヒナーは、日本ではほとんど知られていないが、ドイツ語圏では、彼の名を冠したビュヒナー賞が、戦前のゲーテ賞に代わって、戦後ドイツにおける最も権威の高い文学賞となっているほど、重要な作家である。しかし24歳で夭折したビュヒナーの全作品は、一冊の本に収まるほど少ない。そしてその中の唯一の短編小説が、J. M. R. レンツをモデルにした『レンツ』なのである。

ビュヒナーは、ドイツのヘッセン州ダルムシュタット近郊に生まれ、1831年から2年間ストラスブール大学の医学部で学んだ。彼は当地で、ゲー

テと同様、一人の女性、しかも同様に牧師の娘、ヴィルヘルミーネ（ミンナー）と出会い、婚約した。しかしゲーテとは違って、この関係は彼の死まで続いた。ビュヒナーにとってのストラスブールは、ミンナーとの出会いのほかに、のちに彼の人生を決定づけることになったフランスの革命思想との出会いをももたらした。ドイツとは違って、前年の三月革命の余波がまだ息づいていた当地で、彼はその空気を存分に吸ったのである。その後、33年郷里のギーゼン大学に移ってからは、学業を続けるかたわら、フランスと比べると政治的に遙かに遅れていたドイツの地方都市で、「人権協会」を結成し、農民に蜂起を呼びかける非合法のパンフレット「ヘッセンの急使」を執筆したが、密告されて、他の仲間と共に官憲に追われる身となり、亡命生活を余儀なくされた。彼は秘かにドイツを脱出して1835年フランス領に入り、再びストラスブールに身を潜め、翌36年にかけて解剖学や哲学や創作に没頭したが、『レンツ』も、この時期に書かれた。36年、博士論文『ニゴイの神経系統』が評価されて、36年秋、スイスのチューリヒ大学に私講師として迎えられたが、安定した生活も束の間、翌37年2月にはもうチフスに罹り、ストラスブールから駆けつけたミンナーに看取られて急逝した。

ビュヒナーの『レンツ』は、1778年1月20日、レンツがアルザスのヴォージュ山中の村シュタインタールへ到着し、2月に当地を去るまでの約20間の出来事を描いたものであるが、その素材は、ビュヒナーがストラスブールで手に入れた、シュタインタールの牧師オーベルリーンの手記から得ている。オーベルリーンは、精神を病むレンツを引き取って世話をした人である。オーベルリーンの手記は、レンツの日常の様子を外面から記述したものであり、レンツの奇妙な振舞いや言葉に戸惑いながらも、レンツに対する温かい視線を失うことはないと同時に、みずからの信仰や基盤がそれによって揺らぐこともないのに対して、ビュヒナーの『レンツ』は、レンツの精神崩壊の内的なプロセスに焦点を当てたものになっている。ビュヒナーは、一方では冷徹なリアリストとしての作家兼医学者としてレンツの振る舞いを精神病理学的に観察しながらも、本質的には、レンツと一体化して彼の行動や苦悩を自己自身の問題として受けとめ、存在論的にとらえ

ようとする姿勢を貫いている。レンツの精神の崩壊は、時代の中で挫折し
蟄居を強いられていたビュヒナー自身の精神の危機とつながっていたのだ。

レンツがオーベルリーンや当地での生活によっても救われず、「冷たい
諦めの気持を抱いて」シュタインタールを去ってストラスブールへ連れて
いかれる場面は、オーベルリーンの手記によれば、「こうしてすべては好
結果に終わった」と結ばれているのに対して、ビュヒナーの『レンツ』で
は、このようになっている。「翌朝レンツはストラスブールに到着した。
彼の様子は正気と変わらなかった。人々とも話をした。彼は人がすることは
何でもした。しかし恐ろしい空虚が彼の中にあった。彼はもう何の不安
も、なんの要求も感じなかった。生きているということは、彼にとって必
然の重荷だった。そうして彼は生きていった・・・」⁽³⁾

1961年、ビュヒナー賞を受賞したH. E. ノサックは、この最後の一文
「そうして彼は生きていった」を採り上げ、これは「考えられる限り最も
決定的な結末」であり、「そうして【ただ何となく】生きていく」ことに
対する「最も衝撃的な告発」であるとし、ここに社会革命を越えるビュヒ
ナーの革命的なところがあるとしている。なぜなら、ノサックによれば、
「本来、革命的なものとは、おそらくどの時代にあっても、不正の始まる
境界を知り、この境界の前で足を止め、ノーと言うところにある」⁽⁴⁾ から
である。この境界の前でノーと言うこと、「人がすることは何でもする」
というようにしないこと、「私の中には恐ろしい空虚がある」と勇気を出
して語ること・・・これは、戦後ドイツ文学がとらえた新しいビュヒナー
像であり、革命観であった。

ところで現実のレンツはその後どうなったのか。彼はモスクワ近郊の路
上で斃れるまで、「そうして【ただ何となく】生きていった」のだろうか。
最近、11年に亘るレンツのモスクワ時代についてもようやく研究がなされ
るようになった。それは、ベルリンの壁の崩壊後、クラクフの図書館に所
蔵されているモスクワ時代のレンツの遺稿が再発見されたことによって道
が開かれたものである。それを紹介したドイツ文学者、佐藤研一氏の論
文⁽⁵⁾によれば、レンツは、その後も病氣と貧困に苦しみながらも、ロシ
ア語の力を身につけてロシア史やロシア文学の著作を読破してそれらを翻

訳し、みずからの創作にも取り組んでいた。残された詩や作品断篇には、昔ながらの諧謔や風刺や挑発の精神が躍如としているとのことである。また、ロシアの詩人や作家たちとの交友を通して間接的にロシア近代文学の誕生に一役買ったばかりか、数々の社会改革案の起草に心を砕いていたことまで明らかになった。レンツはゲーテの言うように決して「何の痕跡も残さず突然消えた」のではなく、＜私たち＞の視界から見えなかつただけなのであり、その視界の方に問題があったのである。またこのことは、「そうして彼は生きていった」というビュヒナーの『レンツ』の最後の一文の解釈のみならず、「生きていく」ということの意味自体についても新しい光を投げかけてくれるようだ。

〔注〕

- 1) レンツの邦訳については、筆者の知る限り、岩淵達治訳「軍人たち」(『世界文学体系89』筑摩書房、1963年)がある。
- 2) 『詩と真実—わが生涯より—』第3部(『ゲーテ全集10』所収)、河原忠彦、山崎章甫訳、潮出版社、1980年、156頁。邦訳は他に、岩波文庫(山崎章甫訳、1997年)もある。
- 3) 『レンツ』の邦訳は、手塚富雄・千田是也・岩淵達治監修『ゲオルク・ビュヒナー全集』全1巻、河出書房新社、1970年、219—243頁参照。なお邦題は、「狂ってゆくレンツ」となっている。
原書は Georg Büchner: Sämtliche Werke und Briefe, Hamburg 1967. これにより、オーベルリーンの手記も参照することができる。
- 4) H. E. ノサック、青木順三訳『文学という弱い立場』晶文社、1972年、66—79頁、および谷口廣治監訳、ビュヒナー・レーデ研究会他訳『照らし出された戦後ドイツ—ゲオルク・ビュヒナー賞受賞記念講演集(1951—1999)』人文書院、2000年、113—123頁参照。
- 5) 佐藤研一「モスクワのJ. M. R. レンツ—知られざる作家活動の素描」、『日本独文学会研究叢書』026号、2004年、41—55頁。